

# 日本小児歯科学会会長挨拶

## 輝かしい小児歯科医療の構築を目指して



日本小児歯科学会会長 小 口 春 久

日本小児歯科学会九州地方会が創立20周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。設立時から今日に至るまで九州地方会の発展・充実にご尽力下さいました諸先輩ならびに現会員の皆様方に厚く御礼申し上げます。創設期当初は生みの苦しみが多かったのではないかと推察いたしております。その重圧を見事に乗り越えてこられました先輩諸氏、それをしっかり継承し、発展させ、舵とりをなさってこられた現執行部の先生方、そしてそれを時には厳しく、時には暖かく見守り、協力しあって会をここまで大きく育てて下さった会員の皆様方にとりまして、感慨ひとしおのものがおありかと思えます。

本学会には6つの地方会が存在します。各地方会は、それぞれ独自のカラーを出しておられるように思われます。九州地方会は3校の歯学部と2校の歯科大学が存在していますが、各県ごとに核となる素晴らしい開業医の先生方がおられ、大学の先生方と密に連携をとり、協力しあうチームワークがよくとれた地方会のようにお見受けいたしております。また、開業医の先生方がリーダーシップをとりながら地方会を盛り立てて下さっていることにうれしさを覚え、心から敬意を表します。

「地方会は開業医の先生方を中心にして、大学の先生方はそれを側面からサポートし、それぞれの地域の小児歯科医療を根付かせて発展させ、輪を大きく広げていく。」という、全国に6地方会を発足させた当初の意図を20年経過した現在でも継承され、大きく発展させてこられたことは素晴らしいことです。

現在日本では少子高齢化が社会問題化され、大きくクローズアップされてきています。手間ひまがかかり、非採算性部分が多い小児科の診療室が廃止され、夜間の救急センターに小児科専門医が不在で小児患者がたらい回しになり、遂には死亡するという痛ましい状況も報道されております。国は急ピッチで小児に眼を向けるようになってきました。それでは歯科界ではどうかと申しますと、完全に老人に眼が向けられているのではないのでしょうか。いくつかの大学で小児患者が減少し、診療室の縮小が検討されているという話も耳にします。しかし、本当に小児歯科は必要ないのでしょうか。

将来の日本を背負っていくのは老人ではなく小児です。小児の心身の健康を増進させずに明るい未来の日本が存在するはずがありません。こういう時代であるからこそ、小児歯科医療は重要であり、責任重大なのです。逆説的な言い方をすれば、今が小児歯科の存在を示す絶好のチャンスなのです。守りの姿勢ではなく、今必要なのは攻めの姿勢でしょう。今まで先輩達が培ってこられた小児歯科医療を発展させ、実力を発揮することができる時代がやってきたのです。自信をもって、また自負を持って、新しい質の高い小児歯科医療を目指していこうではありませんか。私は多くの夢を与えてくれるのが小児歯科医療だと思っております。小児の歯科診療を行うことによって日々新たな発見をし、無邪気な、心の美しい小児と向かい合ってお互いを高めあい、喜びを肌で感じるようになるのではないのでしょうか。地道な努力が最後には勝利します。小児歯科医療は歯科の原点です。プロ集団としての大きな力を見せつけましょう。

科学の進歩は著しいものです。EBMに基づいた小児中心の歯科医療を心がけ、今後益々九州地方会が発展され、他地方会の模範となる素晴らしい実績を後世に残されんことを祈念せずにはいられません。

会員の皆様方の益々のご発展とご健康を心から願い、お祝いの言葉といたします。